

P2-31 再発子宮頸癌に対する TP 療法の有用性の検討

国立病院機構四国がんセンター

白山裕子, 平田英司, ウロプレス順子, 松元 隆, 横山 隆, 野河孝充, 日浦昌道

【目的】再発子宮頸癌に対し放射線療法, 手術の非適応症例には化学療法が選択されている。今回, 再発子宮頸癌に対する TP (パクリタキセル, シスプラチン) 療法の有効性, 安全性について後方視的に検討したので報告する。【方法】2001 年 1 月から 2006 年 3 月までの間に再発を確認した評価病変を有する子宮頸癌症例で, 十分な説明を行い同意を得られた 10 例 (扁平上皮癌 7 例, 腺癌 1 例, 腺扁平上皮癌 2 例) を対象とした。パクリタキセル 70mg/m², シスプラチン 35mg/m² を day1, 8, 15 に分割投与し, 28 日で 1 クールとした。抗腫瘍効果は RECIST, 有害事象は NCI-CTCAEv3.0 を用いて検討した。【成績】年齢中央値は 56.5 歳 (28—62), 前治療から再発までの期間は中央値 8 ヶ月 (3—34), 再発部位はリンパ節 4 例, 肺 3 例, 肝 2 例, 子宮頸部 1 例, 腔断端 1 例であった。平均 4.3 (2—6) コース投与され, 腎機能低下により 2 例が 4, 6 コース目から TC (パクリタキセル, カルボプラチン) 療法に変更された。抗腫瘍効果は CR3 例, PR2 例, SD4 例, PD1 例で奏効率は 50% であった。放射線療法の既往は 7 例で, 照射野内再発 4 例中 4 例が SD, 照射野外再発 3 例中 2 例が CR, 1 例が PR であった。血液毒性は Grade3 の白血球減少 5 例, 好中球減少 5 例, ヘモグロビン減少 4 例で, Grade4 の白血球減少, 好中球減少は 1 例であった。また Grade3 以上の非血液毒性はみられず, その他重篤な有害事象は認めなかった。【結論】再発子宮頸癌に対して TP 療法は有用な治療法と考えられ, 放射線照射野外の再発の症例には特に有効であった。また分割投与によって重篤な副作用は回避することができ, 化学療法の既往がある症例にも施行可能であることが示唆された。

P2-32 子宮頸部腺癌に対する paclitaxel + platinum 療法の有用性

藤田保健衛生大

安江 朗, 長谷川清志, 大江収子, 石川くにみ, 西尾永司, 小宮山慎一, 宇田川康博

【目的】子宮頸部腺癌は扁平上皮癌と比較して予後不良とされ, さらに進行・再発癌はその治療に難渋することが多く, 有効な化学療法の開発が望まれている。我々は子宮頸部腺癌に対する化学療法として 1998 年より paclitaxel + platinum (TP/TJ) 療法を導入している。今回, TP/TJ 療法の有用性を検討した。【方法】1991 年から 2005 年までに当院にて治療を受けた全子宮頸部腺癌 43 例のうち, 進行・再発症例 7 例 (粘液性腺癌 3 例, 類内膜腺癌 4 例) に対する TP/TJ 療法の奏効率を検討した。さらに 1—2 期癌で術後 adjuvant として TP/TJ 療法を用いた群 13 例 (1 期 11 例, 2 期 2 例: 粘液性腺癌 6 例, 類内膜腺癌 3 例, 腺扁平上皮癌 4 例) とその他の regimen 群 13 例 (1 期 5 例, 2 期 8 例: 粘液性腺癌 11 例, 類内膜腺癌 2 例) の無病生存率に関して比較した。【成績】測定可能病変を有する進行・再発症例 7 例中 CR: 2 例 (1b1 期再発 1 例, 2a 期再発 1 例), PR: 4 例 (1b1 期再発 1 例, 3b 期 1 例, 4b 期 2 例), PD: 1 例 (2b 期再発) で奏効率は 85.7% (6/7 例) と高率であった。7 例中 3 例は無病生存, 2 例は担癌生存, 3 例は原病死した。また, adjuvant としての TP/TJ 療法群では 13 例中 12 例が無病生存で (観察期間 9—57 ヶ月: 平均 27.5 ヶ月), 再発例は再度の TJ 療法にて PR が得られている。一方, 他の regimen 群では 13 例中 9 例が原病死していた (平均生存期間 56 ヶ月, 平均観察期間 126 ヶ月)。【結論】今回の検討は RCT ではなく, TP/TJ 療法群での観察期間が十分とはいえないものの, 本治療法が術後の adjuvant 並びに進行・再発症例に対して十分に有効な regimen になりうるものと考えられた。

P2-33 Concurrent chemoradiotherapy (CCR) を行った子宮頸癌において血清 SCC 値は再発の予知因子となりうるか

琉球大

平川 誠, 屋宜千晶, 名城嗣久, 當間美紀, 稲嶺盛彦, 神山和也, 長井 裕, 青木陽一

【目的】CCR で治療した子宮頸癌において, 血清 SCC 値が再発の予知因子となりうるかを明らかにする。【方法】1996—2003 年に CCR (外照射 50—50.4Gy, 高線量率腔内照射 3 回, CDDP20mg/m² 5 日間 2—3 コース) で治療を行った子宮頸癌 117 例 (FIGO stage IB2/II/III/IVa 2 例/58 例/54 例/3 例) に治療前, 腔内照射前, 治療終了後に血清 SCC 値を測定し, SCC の陰性化と再発, SCC 値および他の臨床病理学的因子と再発・再発部位について検討した。多変量解析はロジスティック回帰分析を用いた。【成績】CCR にて CR となった症例は 112 例 (95.7%)。再発を 36 例 (遠隔 23 例, 局所 7 例, 両部位 6 例) に認めた。SCC 値は治療前において 104 例が陽性であったが, 腔内照射前には 61 例, 治療終了時には 79 例が陰性化した。血清 SCC 値, 治療前 Hb 値, 局所腫瘍径 7cm 以上, 骨盤内リンパ節 (PLN) 腫大などの予後因子を再発に関して多変量解析すると, 局所再発例ではリンパ節腫大 ($p=0.002$) と局所腫瘍径 ($p=0.02$), 遠隔再発例ではリンパ節腫大 ($p=0.02$) と腔内照射前 SCC 陽性 ($p=0.01$) が独立した予知因子であった。腔内照射前 SCC 陽性例, 陰性例の遠隔再発率はそれぞれ 37.5% (15/40), 13.1% (8/61) で有意差を認めた ($p=0.007$)。また腔内照射前 SCC 値の再発に関する PPV37.5%, NPV86.9% であった。【結論】CCR にて治療した子宮頸癌において, 腔内照射前 SCC 値は遠隔再発予知因子として有用である。